

この感動に……

加藤文子

昨夜からの大雨がやんで、今日は晴れ。

朝カーテンを開けた時、盆栽の並ぶ棚の様子が目に入る。ななめに射した光の帯にクロズアツプされて、水気を含んだ木々や野草が輝いている。

朝食もそこにカメラを持って外に出る。光に導かれるように庭を巡りシャッターを切る。

手裏剣やレイ・ヴィトンを連想してしまうクチナシ色の山ボウシの花がくつきりと、エレガントに開いている。

小さな鉢の中で育つ樹高四十七センチほどの細い幹の上方で咲く花は、特別な感じがする。光がそそがれて、いつそう際立っている。

温室の通路伝いの低い棚では、紫ニガナの黄花が長く伸ばした茎の先端で、花火のように色彩を散らす。うす暗い中で光が届く花々だけが映し出されていて、明暗が印象的だ。



温室入口近くのスタンドで放射状に枝をひろげる山モミジ。風の仲立ちか、ある時ゼンマイの株のあいだから芽を出して成長したものだ。うっすら赤く縁どられた萌黄色の葉が行儀よく並んで、初夏らしい趣を添えている。共生して三十年近くになるが、今ではゼンマイの方が遠慮がちにみえて、家主がどちらなのかわからない。

それぞれを心が描写したようには撮れないのだが、この感動に近づきたい一心で、何度もレンズをのぞいてシャッターを切る。

背景がじゃましないように考えながら、私が美しいとキャッチしたレンズの中の植物を追いかける。光が変わる前に、集中力が萎える前に、ハァハァ言っただけで撮っている。

ファイルした中から月に一度更新するホームページに載せたり、毎年制作するオリジナルカレンダーに使ったり、稀にはあるが展覧会の案内状になることもある。

デジタルカメラを使うようになって、フィルムを入れて撮るといふ動作も遠い記憶になりつつある。慣れるのに時間のかかった新しい出会いも、いつの間にかあたり前のことになっている。



ヤマボウシ ブローチにしたい

撮影：加藤文字